

# 下方他方旧住の菩薩事

文永九年

五一歳

文句の九に云はく

過八恒河沙等

文珠等の八万なり

## 菩薩に三種有り。下方・他方・旧住

弥勒等

亦観音等、他方の内なり。普賢は如何。

文句の九に云はく「是我が弟子なり、忘に我が法を弘むべし」と。記の九に云はく「子、父の法を弘むるに世界の益有り」と。文句の九に云はく「又他方は観音等は他方か。此の土に結縁の事浅し」と。文。道暹の輔正記の六に云はく「付嘱記の六の付嘱に下有り此有り法華・涅槃の十六異を釈すなり。とは此の経は唯下方涌出の菩薩に付す。何が故ぞ爾る。法は是久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す」と。記の四に云はく「尚偏に他方の菩薩に付せず。豈独り身子のみならんや」と。

竜樹・天親・南岳・天台・伝教等本門を弘通せざる事

一には付嘱せざるが故に。二には時の来たらざるが故に。三には迹化他方なるが故に。四には機未だ堪へざる故に。

竜樹は迹門の意を談宣し、天親は文に約して之を釈し、化導の始終を明かさず。天台大師は本迹の始終を弘通す。但し本門の三学は未だ分明ならざるか。記の八に云はく「因薬王等とは、本薬王に託し、茲に因せて余に告ぐ。此の流通の初めに先づ告八万大士とは、大論に云はく、法華は是秘密なれば、諸の菩薩に付す。今下の文に下方を召すが如きは尚本眷属を待つ。驗けし余は未だ堪へざることを」と。大論の一百に云はく「問うて曰く、更に何の法が甚深にして般若に勝る、者有ってか、般若を以て阿難に嘱累し余経をもつて菩薩に嘱累すること有りや。答へて曰く、般若波羅蜜は秘密の法に非ず。而して法華等の諸経に、阿羅漢の受決作仏を説くは、大菩薩のみ能く受持し用ふること、譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」と。

竜樹菩薩は迹化他方なるか、旧住なるか、地涌なるか。

南岳・観音・感通、伝に出づ。天台・薬王、感通、伝に出づ。伝教も亦是

くの如し。

大論の一百。大品経嘱累品を釈するなり。大品経は阿難に付嘱す。大品経は四十卷九十品、最後は嘱累品なり。に云はく「問うて曰く、若し爾らば法華経諸余の方等経何を以て喜王喜王とは薬王か。諸菩薩等に嘱累するや」と。記の八に云はく「法華は是秘密なれば諸の菩薩に付す。今下の文に下方を召すが如きは、尚本眷属を待つ。余は未だ堪へざることを」云云。文殊・薬王等も未だ堪へず等と云ふか。

涅槃經の三に云はく、「若し法寶を以て阿難及び諸の比丘に付嘱せば、久住  
することを得ず。何を以ての故に一切の聲聞及び諸の比丘は悉く當に無常な  
るべし。彼の老人の他の寄物を受くるが如し。是の故に応に無上の法寶を以  
て諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩は善能問答するを以て是の如き法寶は則  
ち久住することを得て、無量千世に増益熾盛にして衆生を利安せん」と。